

# 自然と人の文化

多治見市文化財保護センターだより

## もくじ

- ・企画展「やきものの形～多治見の古代から中世～」・・・1
- ・「高田徳利」 移動展と講演会・・・・・・・・・・・・・・3
- ・住吉古窯跡群発掘調査・・・・・・・・・・・・・・2
- ・北小木のホタル生息数調査結果・・・・・・・・・・・・・・3
- ・七ツ塚遺跡第14次発掘調査と夏休み発掘体験講座・・・2
- ・最近の寄贈資料・・・・・・・・・・・・・・4

## 企画展 「やきものの形 ～多治見の古代から中世～」

多治見で生産されたやきものというと、桃山陶や西浦焼に代表される磁器など、色鮮やかなやきものをイメージされると思います。しかし、多治見の窯業生産の始まりは、8世紀の須恵器生産まで遡り、中世には山茶碗やまぢゃわんの大量生産が行われます。今なお、多治見市が窯業生産地として発展し続けているのは、良質な土を古代から活かして脈々と受け継いだ歴史があるからではないでしょうか。また、本展のテーマであるやきものの形は、時代背景や生産効率などの影響を受けて、柔軟に変化しています。その様子を一番多く生産された碗・皿を中心に展示し、1300年以上に亘る多治見のやきものの始まりを紹介するものです。

多治見で最初の窯業生産となる須恵器は、5世紀の初めに朝鮮半島から技術が伝わり、多治見市では8世紀に生産が開始されました。多治見市を含む東濃の須恵器窯は10基程しか確認されておらず、この地域の需要を満たす程度でしたが、須恵器生産の技術は、この後の灰釉陶器かいゆうとうきや山茶碗に受け継がれるため、基礎となる時代と言えます。

灰釉陶器は美濃窯で最初の施釉陶器で、中国陶磁の模倣品などとして富裕層を対象に作られた高級食器です。そのため、当初の作りは非常に丁寧でしたが、11世紀になると中国から大量に陶磁器が輸入されるようになり、富裕層の灰釉陶器離れが進んだため、農民層を対象にした生産に切り替わります。作りも雑になり、特徴であった釉薬も付けたか分からない程度になっていき、徐々に山茶碗の形へと繋がっていきます。

山茶碗は、東海地方で作られた無釉の碗・皿を中心にした日常食器です。農民層まで広く行き渡り、地元で大量に生産され消費される傾向にありました。13世紀に一大生産地として発展すると、碗の形は徐々に薄く小さくなり高台の貼付けも雑になっていき、最終的に高台が外れて皿化じゅうけんざらします。この形が大窯期の重圈皿に引き継がれていきます。



▲ 山茶碗の「やま」



▲ 展示風景 灰釉陶器

# 美濃焼ミュージアム連携事業

## 「高田徳利」 移動展と講演会

文化財保護センター企画展「高田徳利～高田の窯屋と小名田の商人～」の移動展示を美濃焼ミュージアム（市内東町）で7月2日～8月28日まで開催し、その関連事業として7月13日に講演会「高田徳利の歴史」を美濃焼ミュージアム研修室で開催しました。



▲ 移動展の風景



▲ 講演会の様子

「高田徳利」は、明治時代～昭和10年代に市内高田地区と小名田地区で生産された徳利で、酒屋の屋号や店名が器面に筆書きされていることが特徴です。また、酒屋が酒を販売するときに客に貸し出す容器で、空になると店に戻されるという用途から「通い徳利」あるいは「貧乏徳利」とも呼ばれました。近代の貧乏徳利は、高田徳利のほか、丹波立杭焼、有田焼が国内の流通範囲を三分しており、高田徳利は琵琶湖の湖東地方を境に東日本一帯に分布しました。高田徳利は、多治見だけでなく関東など東日本の地域でもよく知られた存在ですが、その歴史的背景はあまり知られていません。今回の展示と講演は、これまで注目されていなかった歴史的背景を分かりやすく紹介しようというものでした。

7月13日の講演会では、まず昭和50年代に撮影された映像により、高田徳利の最後の轆轤職人<sup>ろくろ</sup>で多治見市無形文化財に認定されていた成瀬教三氏（1901～1992）の徳利成形やインタビューの様子をご覧くださいました。次に、展示担当学芸員の春日美海が講演を行い、高田小名田が徳利の一大産地となる19世紀代（江戸時代後期）の時代背景から、明治時代以降に徳利がどのように作られ販売されたかを紹介しました。当日は、高田小名田地区の住民を始め、市内外から42名の聴講がありました。

## 平成26年度 北小木のホタル生息数調査結果

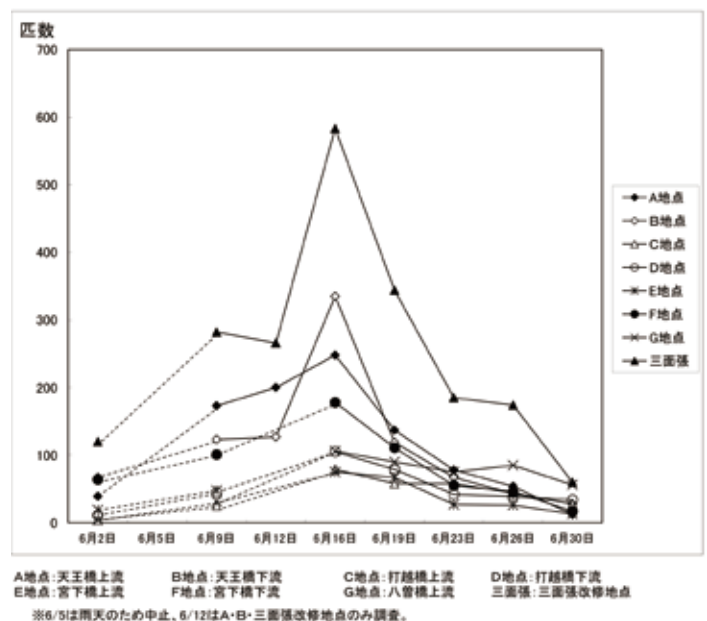
北小木町に毎年数多く飛び交う「北小木のホタル」は、多治見市天然記念物に指定されています。その発生状況について、今年も6月初めから7月半ばにかけて調査を行いました。調査は多くの市民の皆様にご協力をいただいて実施しました。

今年ゲンジボタルは大発生<sup>さんめんぼり</sup>の年でした。過去に川岸と川底をコンクリートで固めた三面張を自然に近い環境に改修した地点はとて多く、過去最高数が確認されました。天王橋より下流の地点でも、昨年より多く確認できました。発生時期は例年と同じで、発生のピークは上流地点も下流地点も同じ時期になりました。北小木川に生息するゲンジボタルは3年周期で発生のピークが訪れることが分かっていますが、平成23、24年に大雨等により壊れた堰堤<sup>えんてい</sup>の工事などが行われ、その周期が乱れました。平成25年は自然災害等もなく、生息数が増加しましたが、今年はそれ以上に増加しています。来年以降、生息数がどのように変化していくのか興味深いです。

ヘイケボタルは、調査地点の最も上流の地点と最も下流の地点の2箇所、毎年わりと多く確認できますが、今年はその2地点の生息数は減りました。それ以外の地点では例年と同じ約10匹以内の生息数でした。ヘイケボタルの生息地は田が主ですが、1度水を切り乾田にするため、生息が難しくなっているようです。

今年の調査データは今後の保護のための資料にするともに、また、来年もホタルの生息数の調査を行っていく予定です。

平成26年度 ゲンジボタルの地点別観測数



## 住吉古窯跡群発掘調査

場所：多治見市長瀬町

期間：平成26年4月14日～平成26年5月14日

面積：約170㎡



◀ 住吉17号窯 作業風景



▲ 住吉17号窯 遺物出土状況



▲ 住吉17号窯 調査区完掘状況

住吉17号窯は、市内住吉町7丁目を中心とした山地内に分布する住吉古窯跡群に属する古窯跡です。平成25年度の住吉古窯跡群の発掘調査では、平安～鎌倉時代12基の窯体が発掘され、特に平安時代の緑釉陶器を焼成した住吉16号窯は大きな発見となりました。

今回発掘調査した17号窯は、山地内の東向き斜面の標高160m付近に築かれた、灰釉陶器を焼成した<sup>あながま</sup>窖窯です。造成工事中に発見されたため、既に窯体や物原の<sup>ものほら</sup>一部が掘削を受けていましたが、窯体の焼成室～煙道部の床面が確認出来ました。遺物の投棄場所である物原は、窯体の東側の谷部に向けて広がり、黒色灰層と共に多くの遺物を検出しました。本窯では、器に灰薬を掛けた<sup>かいゆうとうき</sup>灰釉陶器を焼成しており、遺物は碗を中心に出土し、輪花碗や皿なども少量ながら見つかっています。これら出土遺物の特徴から、本窯は11世紀中葉に稼動していた窯と考えられます。

本窯を含め、発掘調査した住吉古窯跡群の整理作業は今後継続して行われ、住吉町一帯における平安～鎌倉時代の窯業に関して研究が進むことでしょう。

ななつづか

## 七ツ塚遺跡第14次発掘調査

場所：多治見市音羽町

期間：平成26年8月18日～9月現在発掘調査中

面積：約1800㎡

8月から多治見駅の北側に計画されている多目的広場の予定地の発掘調査を実施しています。北側や西側では多くの遺構や遺物が出土しており、<sup>やまちやわん</sup>昨年<sup>やまちやわん</sup>の試掘調査においても中世の山茶碗の遺物包含層が確認されたことから発掘調査を実施することとなりました。現在北側のグリットから順次掘り下げています。埋め立て前

の耕作土の下に江戸期のやや砂質の耕作土があり、その下位の黒色の粘質土から山茶碗片が出土しています。この黒色の粘質土が中世の遺物包含層であることが確認されました。今のところ遺物量も少なく、遺構も確認できていません。南方向の駅に近づくにしたがい遺物の出土量は減っています。今後も調査範囲を広げ、遺構の有無を確認するなどの調査を進めます。

## 夏休み発掘体験講座

この七ツ塚第14次発掘調査現場において8月20日に小中学生を対象として夏休み発掘体験講座を開催しました。参加者は小学生4名、中学生2名の6名でした。午前中は七ツ塚遺跡の発掘調査現場にて発掘調査を行いました。まず、発掘調査員から七ツ塚遺跡と地層ごとに掘り下げていく発掘調査の方法について説明を受けました。その後、実際に草かきを手にして遺物を含む地層の発掘作業を行いました。地層から室町時代の山茶碗などを掘り出し、遠い時代に生きた人々の息吹を感じることができました。

午後からは、学習館に移動して講義を受けました。記録の大切さや発掘調査からどのようにして時代を決めるのかといった考古学の基礎的な考え方を学びました。その後出土した遺物のスケッチや拓本取りなどをしてワークシートの作成をしました。拓本取りは発掘体験講座では初めて行いましたが、みんな上手に取ることができました。ワークシートに張り付けると立派な観察記録ができました。

▶ 発掘体験講座の様子

上：発掘体験の様子 下：講義の風景



## 最近の寄贈資料



▲ 陶磁器見本箱 昭和22年

市内美濃焼卸団地内の陶器商加藤一陶堂様より、店舗で使用していた道具（類）や取り扱った商品など数十点を寄付いただきました。写真は、陶器の見本を入れておくための木箱（3段1組：1段約75.5×45.3×14.0cm）です。座敷に置いてあり、お客さんが来た時に、座敷に上がって頂き商品をお見せするために使われたものです。スリは、加藤一陶堂の前身である加藤一男商店（御幸町、昭和21年創業）の屋号です。蓋裏には、「昭和貳拾貳年七月新調」と墨書で書かれています。この他にも、店舗で使用していた氷冷蔵庫や手焙り火鉢、商品として陶枕や湯呑み茶碗などをご寄付いただき、当時の陶器商の様子を伺うことのできる貴重な一括資料です。

企画展「高田徳利～高田の窯屋と小名田の商人～」を開催した際、高田徳利の資料を提供していただいた高田町の陶門窯山与製陶所与左衛門窯様より、大正～昭和にかけて与左衛門窯を含む共同の登り窯で焼成された高田徳利や窯道具、金属製品の代用品である鉄型土瓶などを寄付いただきました。寄付の中の瓶形徳利（写真左）ですが、昭和初期にガラス瓶が出回るようになると高田徳利は大打撃を受けました。その対抗策として、ガラス瓶の形に似た徳利を製造しました。常に時代背景や需要に合わせた製品作りを行っている様子が伺えます。

与左衛門窯は、現在流し込み鑄込みで袋物（鶏水呑や徳利）の生産を行っています。鑄込みの仕事は大正時代から始め、その前はロクロで高田徳利の生産を行っていました。多治見市の中でも、陶器を中心に生産し続けている高田地域の特徴を知る貴重な資料です。



▲ 瓶形徳利 大正～昭和10年代



▲ 銘酒用徳利 明治～昭和初期



▲ 丸形土瓶（鉄瓶の代用品） 昭和16～20年

ここで紹介しきれませんでした、その他にも貴重な資料をご寄付いただいた方々に、厚く御礼申し上げます。

### 〈利用案内〉

開館時間：9:00～17:00 休館日：土・日・祝日、年末年始

入場無料

### 〈交通案内〉

タクシー：多治見駅から約20分

バス：「美濃焼卸団地」下車 徒歩5分

多治見駅前発 臯ヶ丘9丁目行／可児駅前

多治見駅北口発 臯ヶ丘9丁目行／可児駅前

自然と人の文化

No.44 2014.10

編集／発行 多治見市文化財保護センター

〒507-0071

岐阜県多治見市臯ヶ丘10-8-26

TEL (0572)25-8633 FAX (0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>

